

失われた「神話」の効用

多くの日本人が神話と聞いて最初に思い起こすのは、「古事記(712年)」、「日本書紀(720年)」あるいは「出雲国風土記(733年)」他の古代文書に記された、国造り、天孫降臨、海幸・山幸を始めとする古代の神々が登場する神話であろう。そこには、現代でも子供向けのおとぎ話や小学校の国語教科書に登場する、スサノヲによるヤマタノオロチ退治、天の岩戸の寓話、因幡の白ウサギの寓話他が含まれている。そして、これらの神話は古代天皇制度の皇統譜に繋がってゆく。しかし、言うまでもないが、これらの物語や寓話は、「記紀」や「風土記」に始めから「神話」の名で記されていたわけではない。

徳川時代に本居宣長が創始した国学の流れの中では、「記紀」の記述は、概念的には歴史あるいは「伝説」として理解されており、根も葉もない荒唐無稽な物語として扱われていなかった。しかし、「伝説」なる言葉が伝承、言い伝え、風説などの意味で使われるようになるのは、「記紀」の登場よりもずっと後のことである。国文学史家によれば、伝説の語が初出するのは『漢書』芸文志であり、それが日本の文献に見られるようになるのは平安時代である。さらに、これが「口承文芸」の意味でつかわれるようになるのは20世紀初頭であるとされている。

それでは、そもそも「神話」という言葉はいつ、どのようにして生まれたのであろうか。上記の国文学史家によれば、「神話」という言葉は、明治期に歴史書や翻訳書の中で使われ始めたが、日本の古文献である「記紀」を論じて最初に神話の概念を用いたのは井上哲次郎(1856-1944、明治の哲学者で、日本最初の帝国大学哲学教授)であり、次いで、高山樗牛(1871-1902、明治の文芸評論家、思想家)であった。井上は、とりわけ「古事記」の文学的価値を称揚し、これをホメロスの叙事詩に勝るとも劣らない日本の誇るべき文学的遺産として評価する企ての中で、単なる伝説や伝承とは区別して「神話」の語を用いたのである。それまで伝説として扱われてきた「古事記」を世界文学に特異な地位を占める日本文学の金字塔として称揚するために、人間の豊かな想像力によって創案され、深い世界観によって裏付けられた文芸を意味する「神話」のレッテルが望ましいと考えたのである。

概念あるいは言葉としての神話が登場する過程は以上のような経緯であるが、「記紀」や「風土記」に記された歴史物語としての神話は、周知のように単なる文芸としてではなく、古代の政治権力や支配者によって、その権力(天皇制)の正統性と権威を裏付ける史料として文字化され、利用されてきた。言い換えれば、神話は皇統譜の不可欠の一部であった。したがって、大和王権に繋がる「記紀」と、大和に敗れた出雲勢力によって記された「出雲国風土記」とで、同じ神話を扱ってもそのストーリーや意味付けが相当に異なっているのはそのためである。さらに、明治維新によって日本が「国民国家」へと向かう過程で、古代の神々の物語は国家創生神話、建国神話として文芸の世界から国家神道の世界に移され、国家権力の権威に大きく引き寄せられることになった。

ところで、文明開化や富国強兵を通じて列強入りを目指した明治政府が、その国民統合の権威を裏付けるためになぜ古代の神話を必要としたのかについて考えてみると、神話の

政治的・社会的効用という側面が浮かび上がってくる。史家によれば、ブルジョワ階級の勃興を背景とするヨーロッパ型市民革命ではなく、旧徳川幕府に忠誠な諸藩と、薩長を中心とする雄藩との間の「内戦」で勝利して権力を握った薩長勢力には、そのままでは国家権力を掌握する大義名分が乏しかった。そのため、かれらは内乱で分裂荒廃した国情のもとで自分たちが手にした権力を確立するために、その正統性を裏付ける絶対的な権威を必要とした。それが、王政復古であり、「錦の御旗」であった。こうして、再び世俗的な政治権力を超越する権威として復活した天皇制の威力を高めるために、イザナギ・イザナミから神武に繋がる神代神話が再利用されたのである。

このような権力の権威を補強する手段としての神話は、権力によって意図的に創作され、記録として継承され、美化され、巷間に流布されるが、その権威補強手段としての効用の重要な部分は、物語としての神話が人々の想像力を掻き立て、ある種の劇的表象を紡ぎ出す言葉の力＝劇性に依存している。だから、神々の生々しい所業を伝える「記紀」の神話は、現代でも廃れることなく子供向け絵本や大人向け映画、演劇、絵画などの題材になり得るのである。そして、このような神話の絵画的あるいは劇性が、逆に神話の魅力と生命力を永続化させるのである。こうして、ある種の神話的な表象が、優れた文学作品誕生の触媒になることは、大江健三郎や池澤夏樹の作品、さらには地方の口承に触発されたさまざまな物語が証明している。

ところで、翻って見ると、このような神話の効力は、政治権力だけではなく、民間の「権力」である企業も積極的、かつ巧妙に利用してきた。中でも最大の神話が、原発の「安全神話」であり、「安価でクリーンなエネルギー神話」である。福島原発の過酷事故によってこの「安全神話」が崩壊し、研究者によって「安価でクリーンなエネルギー神話」が厳しく批判されると、与党自民党は新たに「新エネルギー基本計画」を策定し、これに「ベースロード電源」なる神話を盛り込んで原発再稼働の論拠に利用した。

原発の安全神話は、政府、電力産業、受け入れ自治体の巧みな合作であるが、それが現代の神話として人々の意識の中に棲みつくまでには、これら関係者による経済的、広報的な運動（策動？）が執拗に重ねられてきた。その際、多くの専門家とマスメディアが、意図的に、あるいは無邪気に、神話の権威付けと流布に協力してきた。

こうして現代の神話の主人公におさまった原発は、多くの人々の意識の中に、都市や人里から隔離された海沿いに樹木に囲まれて立地し、想定しうるあらゆる事象に耐えられる何重もの安全装置と強固なコンクリート壁で防護され、大工場の中央制御装置のように整然と配置された監視装置を通じて専門技術者集団によって制御される、システムとして完璧で、ほとんど生活感のない宇宙基地のようなイメージ——原発広報誌が掲載する写真そのもの——として、定着したのである。

他方、原発が生み出す手に負えない危険な廃棄物や副産物のことは、現在の原発技術が抱えている技術上のさまざまなやっかいな問題とともに、この無味無臭のポスター的表象からはきれいに消去されていた。また、地域自治体と住民を懐柔するために、政府と電力

業界が湯水のように散布する補助金という名の公的資金が、大都市・工業地帯との落差に苦しむ地域社会の在り方に及ぼす複雑な影響も、装置としての原発の完成された可視的表象の背後に押し隠されてきた。

思い起こしてみると、高度成長期以降われわれは原発神話だけではなく、さまざまな神話を多かれ少なかれ受け入れてきた。「いまや一億総中流」「日本的労使協調」「経済成長を支える企業戦士」「日本的強さの源である集団主義」等々の言葉には、明らかに「神話的臭い」が付きまとっている。日米安保体制において有事に日本を守る米軍の役割も、確たる根拠の無い神話のおとぎ話しである。公衆衛生の専門家によれば、厚生労働省の努力で普及したさまざまな予防接種が幼児の感染症を激減させたという「常識」も、医療関係者が創作した神話として疑ってみる必要があるという。さらに、マーケティング論の研究者によれば、多くの成功を収めたブランドが、自社と自社製品のアイデンティティを高める神話を意図的に作り出し、それを広告会社の協力のもとで多大の時間と費用をかけてメディアを通じて社会に流布し、消費者が自社製品を選択する際に直面する矛盾や懸念を解消する「ソフトな手段」として、巧妙に利用しているのだと言う。この結果、広く社会に浸透した神話を作り出すのに成功したブランドは、競争優位を手にするだけではなく、すでに製品が時代遅れになっても、生き残る可能性が延長される。

さて現在の日本社会に話を戻すと、いまや国民多数の怨嗟の的になった安倍政権は、さまざまな神話をNHKや政府広報、政府に協力的なメディアを通じて国民の耳目に入れることで世論の誘導を図り、法律専門家を含む多くの人々の反対を無視して、危険かつ違憲の戦争法案を成立させるための見苦しい弁明を重ねてきた。同時に、沖縄の基地問題についても、沖縄県民の圧倒的な反対にもかかわらず、辺野古に在日米軍のための巨大な新基地を建設する策動を強引に進めてきた。戦争法案をめぐる議論の中では、法案の危険性と違憲性が明らかになる中で、「日本を取り巻く安全保障環境の劇的変化」という神話がまことしやかに流布され、沖縄をめぐる問題で「オール沖縄」に追い詰められた政権は、「辺野古への移転が沖縄の基地負担を軽減する唯一の方途」という沖縄県民からすればまったく侮辱的で受け入れ難い神話が政府高官の口から繰り返されてきた。

しかし、この間の国会内外での審議や論争を通じて、戦争法案の立法事実、法の安定性、国会による歯止めなどについて、政府の弁明の架空性・虚構性が多くの国民の目に明白になり、政府と一部メディアが創作した神話にもかかわらず、戦争法案のブランド力はボロボロになってしまった。条文が膨大で専門家以外には読み通せない戦争法案の中身が、いかなる粉飾によってもごまかしようの無い醜悪で有害なジャンクフードであることが露見してしまったのである。言い換えれば、政府が利用しようとした神話は、神話の効用である「消費者の矛盾や警戒心を解消」するどころか、逆に矛盾と警戒心を高め、ひとびとの拒絶反応を増幅してしまったのである。辺野古の神話についても、同様である。

権力が、みずからなそうとする治世の正統性をまっとうな論理と根拠をつくして国民に説明できない場合（説明責任を果たし得ない場合）、論理を超えた権威にすがるか、または

矛盾を覆い隠す表象としての神話を利用するしかない。いうまでもなく、現在の安倍政権の支持率は不支持を下回っており、国民の圧倒的多数が今国会での採決に反対している状況は、現政権には拠って立つべき政治的権威が存在しないことを示している。これに代わるマーケティング手法として自ら作り出した「安保環境の変化」や「中国・北朝鮮脅威論」と言う神話も、この間に暴露された自衛隊の内部資料が示しているように、その物語は支離滅裂で、これ以上多くの国民をだまし続けることはできなくなっている。現政権と与党に残された方策は、前民主党政権の惨憺たる失政と選挙制度の欠陥に乗じて手にした国会の多数議席を盾に取り、立憲主義と民主主義の原則をかなぐり捨てて、これまで以上に乱暴かつ野蛮なやり方でこの錦の御旗を利用する以外にはない。これは、現政権の強さを示すものではなく、逆に、政権の自信のなさ、脆弱さを示している。

したがって、主権者である国民多数が、国民の側に立つ野党勢力やさまざまな運動に自主的にとりくむ労働組合や市民組織と小異を置いて力を合わせ、安倍政権を退場させるための強大な国民運動を展開する条件はかつてなく高まっているのである。

(余談) 筆者は数年前に島根県を観光で訪れ、利用した地元タクシーの運転手から、出雲神話について詳しい説明を聞く機会があった。周知のように、この地には日本中の神々が集まる出雲大社が鎮座しているが、宍道湖を中心とする地域一帯には、出雲神話に関係する遺跡やスポットが数多く散在している。その後、出雲神話と出雲大社に関する資料を読んで、大和王権の成立を軸とする日本の建国過程における、出雲勢力と大和勢力との抗争の顛末が、日本の神代神話（したがって、「記紀」や出雲国風土記の記述）に色濃く投影されていることに興味をもった。その後、京都最古の下賀茂神社や信濃の諏訪大社にも、それどころか大和王権のおひぎ元である飛鳥周辺の古い神社にも出雲族（大国主）の痕跡が今に残っていることを知って驚いたのであった。古代史に関心を持つ研究者の間にも、哲学者の梅原猛のように「記紀」を重視する人たちがいる。梅原によれば、古事記の原作者とされる稗田阿礼の正体は、実は藤原不比等（藤原鎌足の二男で、大宝律令の編纂に関わるなど律令国家の成立に尽力した）であり、不比等は自ら信じる律令国家のイデオロギーを古事記の記述に盛り込んだとされている。フランスの思想家レヴィストロースも現代社会における神話の役割を積極的に取り上げたことで知られている。神話が現代の政治権力や企業によって重要なマーケティング手段として利用されている状況に、われわれはもう少し関心を払う必要があるのかも知れない。

なお、本稿の執筆にあたっては、吉田比呂子「日本における「神話」概念の創生」、古川江里子「明治国家の正統化思想と天皇——「万世一系」の意義」、セミオティック・ソリューションズ「ブランドにおける神話作用——成功ブランドに体现されている神話作用とその分析」他を参照したことを付記しておきたい。